

論文

女子大学におけるキャリア形成と課外活動との連関

——観光ホスピタリティ教育とレセプションクラブを事例に——

永 田 美江子*

はじめに

近年、大学におけるキャリア教育に注目が集まり（cf. 佐藤 2007, 杉浦・安部 2015）、「社会人基礎力」（経済産業省）や「学士力」（文部科学省中央教育審議会）と名付けられた、学問領域の知識以外の能力育成が、大学の正課授業で実施されはじめている。この「社会人基礎力」や「学士力」は、コミュニケーション力に代表される汎用性のある能力と解釈され、従来の学校教育では課外活動で養われるものとされていた（cf. 溝上 2009, 日瀨他 2010）。

高等教育における課外活動とは教育課程外活動の略であり、具体的にはクラブ・サークル活動、学生自治会活動、学校行事、課外授業などで、共通した目的や興味を持つ人々が集まった組織団体とされている。近年では大学教育改革の流れをうけて、課外活動とキャリア教育の接続が問われており、その観点からの研究が進められつつある。たとえば、教育学者佐藤龍子は、学生の自立性を促す課外活動の必要性を唱え、それと正課授業とを両輪にすることで自発性を促すキャリア形成が可能であると指摘する（佐藤 2007）。教育学者の時任隼平・久保田賢一は、課外活動に関する研究は豊富にあるものの、学校での課外活動と卒業後のキャリア形成との関係性を明らかにした研究が不足していることを指摘し、教職課程の大学生による高校の授業支援活動を事例として、課外活動の経験が卒業後のキャリアにもたらした影響を明らかにした。時任らは授業支援の課外活動経験は、調査対象者全員にとって進路決定や大学生活を充実させる自己成長のライフストーリーとして就業活動に密接につながっていたことを指摘する一方で、企画力や人前で話す力など課外活動で培ったスキルは、教員になったものには活きるが、他の職種についたものには必ずしも活かされず、就業活動の行われる職場環境に依存した結果となったことを指摘する（時任・久保田 2013）。また、江口彰は、インターンシップと正課外活動の経験を比較し、インターンシップは仕事の業務的スキルの習得、企業文化の経験など実務的なテクニカル技術や企業文化を含めた各仕事分野の常識・基礎知識を獲得するのに適しているのに対し、課外活動はコミュニケーション能力やリーダーシップの育成などの人間関係能力を育成することに適していると指摘している（江口彰 2009）。

これらの先行研究は課外活動と人間形成及びキャリア教育へのつながりを言及しているものの、課外活動におけるジェンダーの関連においては、例えば、大東貢生らがスポーツ推薦の体育会系学生と勉学の関係を調査し、体育会系男子学生は女子学生よりも自ら学ぼうとしない傾向にあるのは、権力構造の中でスポーツにおける肉体的男らしさは、専門的男らしさの上位にくるといふ報告をしている（大東・平田他 2015）が、課外活動において女性らしさという女性のジェンダーをあつかった研究や、課外活動で女らしさというジェンダーがキャリア教育にいかに接続しているのかを調査した先行研究はない。

本稿で対象とする平安女学院大学の「レセプションクラブ」は、観光ホスピタリティ産業に適した人材育成のためのキャリア教育との効果的な連関を目指して設立・運営されている課外活動である。しかし本文で示すように、同クラブでは広義の接遇に関するスキルを学ぶが、学生たちの実際の就業先は彼女たちが入部当初に希望した観光

キーワード：課外活動、ジェンダー、マナー、ホスピタリティ、キャリア教育

*立命館大学大学院先端総合学術研究科 2011年度3年次転入学 共生領域 平安女学院大学准教授

業界とは限らない。また同クラブは各種広報イベント等での個人プレー的な活躍が際立ち、従来研究が課外活動の第一の意義として挙げる「組織的に／協働して」物事に取り組むことを通じて培われる人間関係にまつわる能力は、重要でないわけではないが、第一義的な価値を持たない。

本稿では、同クラブの活動を事例として、観光産業への就労を目指す女子大学生にとって課外活動がいかなる経験の場となっているかを明らかにする。それを通じて、課外活動とキャリア教育との連携は、必ずしも希望する就業先へと効果的に直結するスキルの獲得や人間形成だけに意義があるわけではなく、現実の企業社会のジェンダー関係を知り、大学生が特定の職種に抱く「憧れ」や「期待」を課外活動での体験を通じて発展的に消化しつつ、期待と現実との折り合いをつける中から、今いちど自身にとって望ましい就業とは何かを見つめ直す機会となることも重要な意義となることを指摘する。

筆者は国際観光学部のホスピタリティとマナーの授業とレセプションクラブの顧問を兼任している。以下の記述は、筆者が担当教員・顧問として見聞きした内容を含んでいるが、可能な限り個人が特定できないよう配慮した。また部員には2011年から筆者の研究内容について繰り返し説明し協力を求めており、聞き取りした各年度のクラブ役職者などの語りについては、当人たちに掲載の許可を得ていることを付記しておく。

1. 課外活動とレセプションクラブ

1-1 レセプションクラブに関心を寄せる女子大学生の背景

本稿の対象は、平安女学院大学国際観光学部の課外活動レセプションクラブの部員である。まず、本稿の背景となる大学と学生について簡単に説明する。

平安女学院大学は、2015年に創立140周年を迎えたミッション系女子大学である。同大学の設立経緯と国際観光学部の授業展開については別稿（永田2015）にて詳述したので割愛するが、同大同学部の目的は、接客が中心業務となる航空・ホテル・ブライダル業界といった観光産業への人材輩出に適した教育である。2年次より観光学とホスピタリティを学ぶ観光ホスピタリティ・京都学コースと、語学を学び英語及び中国語圏への一年間の留学制度をもつ外国語特修コースに分かれた授業カリキュラムが展開している。また同校は「貴品女性」¹の育成を学院の教育目標に掲げており、個別の授業だけでなく課外活動においてもホスピタリティやマナーの教育に力を入れている。

次に、2014年度に筆者が担当していた1年次の必須科目「ジェネリックスキル」の受講者である1年生（67名）に対して実施したアンケート結果から、同校の学生の受験形態や入学動機を示す。

同校は京都市内にあり、市内の女子大学の偏差値では中間に位置する²。就職率と面倒見が良いとの評判を聞いた保護者や高校の進路指導教諭の薦めで受験するパターンが多い。上記のアンケート結果によると、他大学と併願受験をした入学者は、センター試験受験者が3名、一般入試受験者の9名とあわせても、67名中11名と全体の1割程度である。あとはAO入試や指定校推薦などの各種推薦制度を利用し、平安女学院大学だけを受験して入学した者で、併願受験先の大学は京都府内の私立女子大学が多数を占める。また美容やホテル、ブライダルなどの専門学校を選択肢として考えていた学生も4名いた。他大学や専門学校と比較して、平安女学院大学を選択した理由を複数回答方式で挙げてもらった結果、希望者全員が海外へ留学できる「留学制度」を理由に挙げる者が最多で（9回答）、次に就職率のよさ（5回答）であった。

1-2 「レセプションクラブ」の概要と設立経緯・実践目的

次に、レセプションクラブの概要を述べる。同クラブは、平安女学院大学が2007年に国際観光学部を開設した際に、航空業界やホテル業界といった観光産業への人材育成を念頭に、同校の理事長の発案によって設立された。「レセプション」とは、英語のレセプション（Reception）から派生した「歓迎する者・案内する者」の意であり、主にホテルやコンサートホール、各種式典での受付、案内業務に従事する者のことを指す。同クラブの構成メンバーは、マナーやホスピタリティに関心を持ち、就職先に航空やホテル業界の接客、受付業務などを希望する1年生から3年生までの女子学生39名と顧問の筆者である。学生全体数が300名弱の同学部の課外活動においては、最も部員数が多い。

次に活動目的と具体的な活動内容について説明する。同クラブは、「実践によって学内での練習や授業では得られない学びを経験する」ことを目的に掲げている。主な活動は、クラブが発足した時から毎年、活動依頼を受けている鉄道会社主催の音楽会をはじめ、平安女学院主催の式典やパーティーの受付案内、各種学会の受付、イベント司会などを行うこと、および、そのための接遇やマナーを自主的に勉強することにある。また同クラブの特徴は、課外活動での学びを部員各人の就職に活かすことを、実践的に目指していることが指摘できる。

表1 2014年度レセプションクラブの年間練習内容

4月	スカーフの結び方・メイクアップ・身だしなみ・笑顔の作り方
5月	言葉遣い・接遇用語・立居振る舞い
6月	テーブル・マナー
7月	浴衣の着付
9月	来客対応
10月	クレーム対応

上記の表は2014年度の年間活動内容である。活動は月に1～2回程度で、基本的には顧問である筆者が表にある練習内容を教授している。ただし外部からメイクアップの専門講師を招くことや、京都市内の著名なホテルに出向き、ホテルのスタッフによるレクチャーを受けてテーブルマナーを学ぶこともある。学生による自主的な課外活動であるため、練習内容は学生の主体的な提案に基づいて生まれ、各年度で異なっている。例えば、2014年は部長からの提案を受けて同年8月に京都市内のシティホテルでアフタヌーンティーパーティーを実施した。また2015年には「秘書検定に合格したい」と希望があり、同年5月に筆者が講師となり秘書検定対策勉強会を開催した。

しかしながら、学生による提案に基づいているとはいえ、クラブでの練習・勉強内容は筆者が正課の授業「ホスピタリティマナー演習」で実施している内容と酷似している。次節では、正課の授業内容との比較および卒業生への聞き取り調査をもとにして、同クラブ活動で培うスキルの内容を検討したい。

2. 課外活動で学ぶマナー・ホスピタリティ

表2は、正課授業「ホスピタリティマナー演習」15回の内容である。この授業は、1990年代以降に盛んに行われた企業の新人研修がベースとなっている。授業では毎回『JALキャビンアテンダントのいきいきマナー講座』（1989）を中心とし、多種多様なビジネスマナーの啓発本を参照して作成したレジュメを配布している。

表2 正課授業「ホスピタリティマナー演習」シラバス（2015年）

授業名	ホスピタリティマナー演習
到達目標	マナーの歴史、マナー概念の理解
	ビジネス社会に通用するマナーの具体的習得 学内検定の受験と認定を目指す
授業計画	①オリエンテーション、マナー概念の理解
	②西洋・日本・アジアのマナーの成り立ち
	③マナーの5つの要素（あいさつ、身だしなみ、表情、態度、言葉遣い）理解
	④挨拶・身だしなみの体得と第一印象アップ
	⑤表情・態度の体得
	⑥敬語と言葉遣いの理解
	⑦コミュニケーションの手段としてのマナー
	⑧電話応対の実践
	⑨来客応対の実践（受付・案内・席次）
	⑩来客応対の実践（名刺の扱い・茶菓）
	⑪冠婚葬祭「冠」のしきたりと年中行事
	⑫冠婚葬祭「婚・葬」のしきたり
	⑬冠婚葬祭「祭」のしきたり
	⑭和の作法
	⑮まとめ

レセプションクラブでは10月の音楽会で必要となる受付と案内応対・接客時の対応、心構え、身だしなみの体得に重点を置いている。そのため、接遇の実践的スキルの教授が主となるが、ホスピタリティマナー演習でもロールプレイングなど実践的なカリキュラムが組みこまれており、授業と課外活動での練習内容それ自体には特段の違いはない。同クラブの練習内容は、表の④⑤⑨に対応した3回分相当となる。

次に、同クラブの経験者へのインタビューを通して、学生たちがクラブで学んだスキルをいかに認識しているのかを検討する。対象者は、クラブの活動に参加した経験を持つ卒業生（3名）とクラブを引退した4年生（1名）である。2015年8月25日と26日に、インタビューの趣旨について説明し、論文掲載の了解を得たのち、ひとりあたり20分～40分間の電話によるインタビューをおこなった。インタビュー内容は、「活動に参加した中で現在役に立っていることはなにか」である。

【卒業生 A (2013 年度部長・高級外車販売ショールームへ就職)】

「レセプの活動は、(当時) ①思っていたより役に立った。スカーフも最初はこんなんやって役にたつのかと思っていたけれど、会社の制服でスカーフをするし、他の人より上手くできる。研修でも他の新入社員はお辞儀の種類を知らなかったのが優越感があった。仕事でお客さまにお茶を出す時も先輩に教えてもらわなくてもできた。レセプでは広い意味で気配りを学んだように思う。体がさっと動く(略)音楽会は実践の場だったと思う。お客さんに接客するのは自分しかいないから、まわりをみて自分で何とかしないとイケないのは経験になった。就職の面接でもメイクや建物に入るときにコートを脱ぐ、口角をあげるなどが役にたった」。

【卒業生 B (2013 年度活動・国産車販売ショールームへ就職)】

「今の会社は車の販売で男社会。クラブの経験が一番役に立っているのは、第一印象が磨かれたこと。営業所には社員さんが18人いるけど、その中で一番印象がいいとお客さんにいわれた。就職活動の時も、プラスになったと思う。ただ面接の訓練をしてそのときに受け答えができたとしても、実際に働くときには上手く受け答えができないときがある。(略)レセプでやった音楽会がお客さんと実践ができたからいい経験になった。今は接客の仕事をしているから敬語の使い方をもっと勉強しておけばよかったと思う。よくお客さんに対して会社の人のことをいうときに尊敬語を使ってしまう。電話応対もアルバイトでやっていたけど、会社の電話はもっと気を使うし、もうちょっとうまくなりたい」。

【卒業生 C (2013 年度副部長・旅行会社カウンター営業へ就職)】

「レセプの活動で役に立ったことはいろいろあるし、②思うこともあるけど、うまく言葉にできない。荷物を渡すときに本やパンフレットなら両手を使ってお客さんの向きにするなどが役に立っているかな。(新人)研修の時にはお辞儀の種類を説明できて先生に驚かれた。今の業務でカウンターから立ちあがって挨拶をするときは、自然に前に手を組んでいるし、様になっているといわれる。身にしみついているって感じ(略)ただ業務ではちょっとした報告をすることを忘れてたりして注意される」。

【4 年生 (2014 年度部長・老舗和菓子会社内定)】

「③いろいろな人と関わったのが、レセプをやっていて一番の収穫だと思う。音楽会や学内の行事なんかで年代の違う人と話せたり、クラブ活動だから先輩後輩のタテの関係ができたのはよかった。先輩はスーツが似合っていて、先輩に憧れて入部したけど自分も先輩みたいになれたかは心配。憧れの先輩と話ができたのはよかったと思っている。」

聞き取りを行った4名は、部長などの役職を務めるなど同クラブの活動に最も意欲的に取り組んだ学生である。上述したように、経験者たちはクラブ活動での実践を積み重ねることで、スカーフの結び方からお辞儀、笑顔とアイコンタクト、テーブルマナーなど具体的なスキルや「気配り」が身につき、それらが就職活動や現在の仕事に活きてると答えた。4名の業務は全員が接客であり、学生の頃からマナーを意識していたレセプション活動経験者は、入社後にビジネスマナーを学んだ他の社員よりも評価され、それが業務を開始する際の自信になったことは

間違いない。

しかし一方で、これらのマナー自体はおそらくは他の新入社員もしばらく経てば、企業内の研修や上司・先輩からの注意を受けて身につくものであると考えられる。またスカーフの結び方やマナーなどは、正課の授業でも教えているため、必ずしも同クラブの経験者だけが獲得したスキルではない。さらに意欲的に取り組んだ学生でも「敬語の使い方がうまくできない」「業務ではちょっとした報告をすることを忘れる」などの課題を挙げており、これから職業キャリアを積み上げる過程で、課外活動で学んだ内容がどれほどの効果を発揮するのかは定かではない。

下線部①にあるように、実際には多くの部員はクラブ活動に従事している際には、そこで学んでいることのすべてが就職活動に役立つとは考えておらず、また下線部②にあるように、彼女たちがクラブ活動で得たものは具体的なスキルとしては表現できないものである。彼女たちが得たものの一部は、下線部③の語りにあるように多様な人との関わりや「憧れの先輩」、タテの人間関係など課外活動ならではの側面に目を向けることで明らかになると考えられる。次節では、レセプションクラブの入部動機と具体的な活動について事例を挙げながら記述し、女子学生が同クラブの何に魅力を感じ、どのような関係が構築されているのかを明らかにしたい。

3. レセプションクラブへの参加のインセンティブ

3-1. レセプションクラブへの関心—美しさと人間関係

レセプションクラブ入部の動機や勧誘活動の実態から、同クラブに対する部員たちの期待を検討する。2015年6月16日、1年生から3年生のレセプションクラブに所属する、もしくは入部を検討している学生（33名）を対象に、クラブへの入部理由について自由回答方式のアンケート調査をおこなった。

入部の動機は、「活動内容に興味があった」が最も多かった。ただしこれは自由回答方式のアンケートの取り方に難があったためであると考えられ、より具体的な意見は、次の二つに大別される。第一に、「秘書検定を取りたい」や「おもてなしが学べる」「礼儀マナーが身につく」「将来のため」など、就職活動から就業後の仕事に役立てることが可能な具体的なスキルを身につけたいとする意見である。いまひとつは、ある種の芸能活動に対する憧れが挙げられる。「テレビで活動を見て」「先輩に憧れて」「平安ならではのクラブ」などの理由は、以下で述べるように同クラブが「平安女学院ならではのクラブ」としてメディアで取り上げられたり、先輩部員が活躍しているのを知っていることである。

毎年4月、勧誘を兼ねて開催される新入生歓迎会では、同クラブの制服であるキャピアアテンダントを模したスーツを着用し、首にスカーフを巻いた先輩部員が、「レセプションに入れば、テレビや新聞にも出られるよ。芸能活動みたいな感じ。一緒にレセブをやって女子力をあげよう」と新入生に声をかけており、先輩部員の「芸能活動みたい」という勧誘文句の内実を知りたいと筆者に質問にくる新入生もいる（2014年4月8日）。

表3 「レセプションクラブへの入部動機」

活動内容に興味があった	6
秘書検定を取りたい	4
平安ならではのクラブ	4
おもてなしが学べる	4
礼儀マナーが身につく	3
将来のため	3
就職に役立つ	2
先生の助言	2
先輩に憧れて	2
おしとやかになりたい	2
貴品女性になりたい	1
テレビで活動を見て	1
経験としてよい	1
課外活動がしたかった	1
学んだことが活かせる	1

同クラブは、東京オリンピック開催で話題になった「おもてなし」を女子学生が提供するクラブとして、大学の広報活動に一役買うだけでなく、メディアから取材を受けることが年々増加している³。部員の中には上級生になると市町村の観光大使やミスきもの女王などに応募する者も現れ、以下の表に挙げるように市の重要なイベントや観光大使、モデルなどとして活躍する者もいる。

表4 「レセプションクラブへの取材・部員の活躍」一覧

2012年	新聞取材1社
2013年	テレビ取材2局、新聞取材2社、大学HP及び広報誌掲載
2014年	部長が学園祭における「ミス平女」グランプリ
	京都市イベント司会依頼
	アメリカ下院議員のアテンド
2015年	日本ペンクラブ関西支部受付案内
	副部長がI市観光大使に就任
	新聞取材1社
	京都市地下鉄イベント司会
	京都市と大学の提携において司会と案内
	テレビ取材1局
	地下鉄イベント（ファッションショーのモデル）
	地下鉄イベントPRを担当

こうしたメディアでの活躍が功を奏して4月には20名以上の1年生が入部するが、夏休みを過ぎて本格的な活動を開始する頃になると、テーブルマナーなど日常で使うことがないマナーの練習に疑問を持った者や、「貴品女性」を念頭にしたふるまいを心がけなければいけないと先輩たちから注意されることに違和感を持った者などはクラブをやめていく。またクラブ名簿に名前だけを連ねて、活動に参加しなくなる者たちも続出する。したがって実質的な活動をする部員は、1年次から3年次まで合わせて20名前後に落ち着く。いわゆる「幽霊部員」になる学生のなかには、レセプションクラブに存在するある種の「ヒエラルキー」を感じ取り、それにうまく乗ることができなかった者が多々含まれる。次節では、同クラブ内の人間関係について記述する。

3-2. レセプションクラブにおけるヒエラルキーの存在

レセプションクラブには、通常の課外活動にみられる先輩後輩関係とは別のヒエラルキーがある。それは上述した「ミスコン」やイベントでの活躍において重視される外見的评价に基づいている。外見に対する部員たちの高い価値づけは、部長選抜の際に顕著に表れる。筆者は2012年以降、毎年部長選抜の理由を他の部員に質問をしている。回答をきくと、「Aさんは背が高くって、かっこいいから」（2012年）「Bさんは、エキゾチックで華があって、どこにいても目立つから」（2013年）、「Aさんは私たちの学年で一番かわいい」（2014年）などと外見的评价で占められる。部長は当該クラブだけでなく、大学の人材育成目標「貴品女性」を目指す第一の候補者として、雑誌や大学案内パンフレットなどの広報紙への登場をはじめ、大学を内外のお客様に広く紹介するパーティーや、大学上層部の半ば私的な集まりの際にも参加を要請される。すなわち、同クラブ部長になることは、大学を代表するタレントのような存在として扱われることを意味する。また学生たちは、大学上層部と関わりが持てることや、学生の立場では会う機会のない各界の著名人と会えることなどを部長に選抜されたいインセンティブとして語る。

外見的美しさに基づく同クラブのヒエラルキーは、毎年10月に開催される「都の音楽会」への参加メンバーの選抜の際にも表れる。この音楽会に参加する部員は、3年生を中心に選抜された10名である。選抜は3年生の話合いで決められ、顧問の筆者は相談を持ちかけられた時だけアドバイスする立場をとっている。

事例1. 音楽会メンバーの選抜理由

「先生、今度のコンサートのメンバーが決まりました」と部長が筆者に一枚の紙を見せた。筆者がメンバーの名前

を確認すると、部長は選抜理由について説明を始めた。「先生、今回メンバーにはいない1年生のAさんは綺麗だから、出てもらいたいけどBさんと一緒にあまり練習に出ていなかったし、まだ次もあるし、2年生のCさんとDさんはかわいいし責任感があるから安心かな。1年のEさんは反応があまりなくて、ちょっと心配だけど、これでいいですよ。1年生のFさんはレセプ入ってるけど、レセプっぽくないし、Gさんは超お嬢様だから接客は難しいと思うし」。音楽会への参加者は大学を代表する者として扱われる。Aは部長としてそのことを念頭に入れ、他の3年生と人選をしたと筆者に説明した(201×年9月)。

教育学研究者の鈴木翔は、中学や高校の生徒間には成績とは違う「地位の差」があることを示し、それを「スクールカースト」と呼んだ(鈴木2012)。彼は生徒間のヒエラルキーの決め手となるものは、教師にとってはコミュニケーションに代表される能力であるが、生徒にとっては学校内の人間関係に及ぼす影響力や結束力といった権力構造であると指摘する。教育学者宮崎あゆみは、1990年代に女子高校のジェンダー・サブカルチャーの調査を通じて、学校の要求する「貞淑さ・真面目さ」をめぐる差異化とそれに対する戦略に応じてクラスの生徒が特定のグループへ分化していく動態や、女性性を脱ぎ捨てたサブカルチャーを形成していく過程を示した(宮崎1993a; 1993b)。またキャリアコンサルタントで、女子大学の非常勤講師でもある白河桃子は、その著書で女性同士の格差や優位性を「女子カースト」と呼び、各自の環境、世代、資源によって女子間格差があることを指摘した(白河2013)。「芸能活動」を組み込んだレセプションニストクラブは、これらの研究が述べる、ヒエラルキー、カテゴリー化、女子間格差が顕著な形で存在する。上記の部長の説明からは、人選基準には課外活動への貢献度や学年などのほかに、「綺麗」「かわいい」などの言葉に表れる外見、そして「レセプっぽくない」「超お嬢様だから」などの言葉に表れる「彼女たち自身がレセプションニストクラブ員としてふさわしいと考える、態度や雰囲気」が重視されていることが明らかである。

ここで重要な点は、こうした部員による評価基準は必ずしも彼女たち自身が予め持っていた基準によるものではないことである。部員たちは入部後、新聞やテレビ等の取材、式典やイベントにおいて記者や企業人から声をかけられ、発言や出席が求められる部員は誰かを頻繁に目撃することになる。取材やイベントに引っぱりだこになる者がいる一方で、同じように活動していても活躍の機会にまったく恵まれない者もいるという事実は、彼女たちにとって普段の練習で培う接遇のスキル以外の評価が「社会」には存在していることを認識する契機となる。それは企業が求める性別役割分業、女性が補助的業務を担い、気配りや第一印象のよさといった要素を重視するジェンダーに合致しているかどうかとも含まれている。このような外的な評価は次第にクラブ内において固定化されていく。それは、彼女たちのクラブ活動への強いインセンティブになると同時に、クラブ活動への参加のインセンティブを喪失させる契機ともなる。

たとえば、音楽会の人選で「お嬢様だから」と評された部員は筆者に「(頑張っても)声がかからないので、クラブをやめたい」と相談にきた。正式な退部の申し出はなかったものの、その後の活動には参加していない。だが同クラブでは個人のタレント性がものをいう点に疑問は持たれておらず、不参加の個人を引き止めたり、平等に機会を配分したりといった関係はほとんどみられない。ここには外見や気配りといった従来から女性に求められているジェンダーを基準にした価値判断があり、その価値判断によってクラブの運営がおこなわれるという構図によっているからである。

3-3. レセプションニスト部員の進路選択

前節では、レセプションニストクラブ内の練習内容と社会関係を記述した。本節では、同クラブの活動の効果と就職活動との関連性を検討する。まず部員の就職希望先と実際の就職先をあげ、進路選択の変更がいかにおこなわれているのかを明らかにする。以下の表は、2014年2013年のクラブ役職者の就職希望先と就職先である(4年生は内定先)。

表5 2014・2013年度「レセプションニストクラブ役職者の就職希望先と就職先」

2014年度	部長	副部長	会計
3年次の希望先	受付志望	ラグジュアリーホテル志望	公務員志望
4年次の内定先	老舗和菓子会社内定	製薬会社営業職内定	公認会計士事務所事務内定

2013年度	部長	副部長	会計
3年次の希望先	エアライン志望	旅行会社添乗員	ホテル・鉄道志望
就職先	高級外車販売ショールーム	旅行会社カウンター営業	大手ドラッグストアチェーン

前述したように、同クラブは課外活動が観光産業への就職に接続することを目的に設立されたクラブである。入部する学生も航空業界に代表されるホスピタリティ産業への就職を目指している者が多い。表には3年次から公務員を希望し、公認会計士事務所に内定が決まった部員もいるが、クラブ全体としては少数派である。また、3年次の希望と4年次の就職決定先が一致するのは、2013年度副部長の旅行会社だけである。次にこれらの中から特徴的な事例を取り上げ、具体的な進路選択の要因を検討する。

2013年の会計Aの場合

Aはホテルへの就職を考えて入学してきた。①ビジネスインターンシップで実習に行った先のホテルで優秀さをかわれ、期間終了後もアルバイトとして勤務し、卒業間際まで続けていた。Aはホテルのアルバイト経験によって接客業がやりがいのある仕事だが苛酷な労働であることを知り、マネジメントなどができる総合職に目が向いたと語る。就職活動では、大手鉄道会社子会社の接客の仕事に内定した。しかし地元に戻りたいという気持ちが強くなったこともあり、Aの地元でチェーン展開しているドラッグストアの会社に就職を決め、卒業と同時に地元に戻った。②Aは対外的なネームバリューのある大手鉄道会社子会社の接客と、はじめは販売からスタートするが、将来はマネジメントに関われるかもしれない可能性を秘めた地元の企業の仕事を比較し、後者を選んだ。Aはその会社の入社式で、50名近い新入社員を代表して誓いの言葉をいったと卒業後ほどなく学校を訪ねてきて、入社式での宣誓の姿が掲載されている冊子を筆者にみせてくれた（2015年5月）。

2014年の副部長Bの場合

Bは海外に関心を持ち、他大学と比較して最も留学条件がよいと思われた平安女学院大学に入学したという。同クラブには「変わったことがしたかった」ので入部したと語った。大学入学前後は航空会社のグランドスタッフになりたいと考えていたが、身長の高さゆえにグランドスタッフをあきらめたという。①この時は同時にホテル業への関心もあったが、ホテルでのアルバイト経験でサービス業の現実を知り、徐々に関心が薄れた。Bに気持ちの変化があったのは、②1年間の海外留学経験でメイドインジャパン製品の素晴らしさを知ったときであり、「製品を作ることは自分にはできないが、それを売ることを仕事にしたいと考えた」と語る。結果、Bは、大手製薬会社の営業に内定したと喜びに弾んだ声で報告してくれた（2015年9月）。

同クラブに入部する学生の第一の希望先は、航空業界である。しかしキャビンアテンダントやグランドスタッフへの就業は、事例のBが語ったように英語力だけでなく、外見的な評価が重視されると学生たちには信じられており（身長制限を設けている企業は現在ではない）、非常に競争倍率が高いことを入学後に知ることとなり、本格的な就職活動を始める3年次より前にみずから断念する学生が増加する。実際に同クラブが活動をはじめて8年、これまでの部員の就職先に航空会社の名前は挙がっていない。

航空業界に次いで学生たちに人気のあるホテル業界は、2名の事例（下線部①）に示されているように、アルバイトやインターシップの経験によって、逆に就業意欲が薄れる傾向にある。これは他の学生にも共通しており、アルバイトやインターシップでホテル業界に携わった学生の多くは「土日がない／就業時間が不規則であり、友人と遊べない」「苛酷な労働のわりに給料が少ない」「礼儀に厳しく、人間関係が難しい」などと、4年次には別の就業先を

模索する傾向にある（ホテル業界に就職したのは1名のみである）。

ただし一方で、前述した学生は、営業や販売を含めた広義の接遇への関心は維持しており、下線部②で示したように改めて就業先を考え直しながら、自身のスキルが生かせる職種に内定を得て、いずれの学生も就業先から活躍を期待されたり、第二節で述べたように終業後に望ましいスタートを切ったことを報告している。

当初希望した職種の厳しさや就業の困難を理解し、いくつかの選択肢を諦めつつ、改めて就業先を模索すること自体は、現在の中高等教育のあり方を考えると、大学生としてはごく一般的な事態だと思われる。むしろキャリア教育との接合を考えた際に、特定の職種に就業できなければ、即座に価値を失うような課外活動のあり方を考案することのほうが非現実的かもしれない。以下では、同クラブ最大のイベントである音楽会での出来事を詳述することで、学生にとっての同クラブの活動意義を検討する。

3-2. 都の音楽会での職業体験

まず「都の音楽会」の概要を説明する。「都の音楽会」は、京都市内の世界遺産を有する神社で10月に開催されるコンサートイベントである。毎年、クラシックやジャズの著名な演奏家を招き、事前に一般応募者の中から、1部2部それぞれで1000名程の観客を無料招待している。主催は鉄道会社で、会場の神社をはじめ企業・各種団体が協賛し、実行委員会が編成される。レセプションクラブは、その実行委員会の接遇を担当する部門の所属となる。9月には部長と副部長が顧問の筆者とともに、実行委員会の全体会議に参加する。この会議の場で、部長と副部長は女子学生ではなく、運営スタッフ一人として扱われ、他の参加者同様に挨拶をし、質問や依頼があればその都度返答する。会議への参加によって部員は「音楽会を一緒に作っている一員になった感じがする」（2014年副部長）と語る。その前後の日程で、来客対応の練習をし、本番にのぞむ。以下に、「都の音楽会」の一日を記述する。

表6 「都の音楽会」 一日の流れ

音楽会準備期間	12:00	集合	会場近くの最寄り駅にて
	12:30	全体ミーティング	主催者及び運営委員会より挨拶
	12:40	部署ごとのミーティング	各部署業務ごとの諸注意
	15:00	受付開始	抽選による無料招待のため、座席は先着順。例年コンサート開始の2時間前から行列ができ、レセプションクラブの学生は、他のスタッフとともに行列をさばく業務もおこなう
音楽会開始期間	16:00	1回目の音楽会開始	所要時間はアンコール曲も含めて1時間程度。交代で食事・休憩
	17:00	1回目の音楽会終了	お見送り・アンケート回収
	17:30	2回目のお客様を案内	
	18:00	2回目の音楽会開始	1回目と同じ演目
音楽会終了期間	19:00	コンサート終了	お見送り・アンケート回収
	19:30	出演者と写真撮影	
	20:00	解散	

表にある通り、音楽会での活動は、12時の集合から16時の音楽会が始まるまでの音楽会準備、16時から19時までの音楽会実施、19時から20時以降の音楽会終了の3つに区切られる。

音楽会準備期間

音楽会準備の数時間は、レセプション部員から音楽会のスタッフ、すなわち学生から個人の裁量で行動をしなければならない職業人へと変わるための時間である。選抜された10名は、集合時間の10分前には集合場所に集まり、その後に控室に入る。前述したように、選抜時から外見的美しさが重視されているため、学生たちは手先の器用な者に手伝ってもらいながら髪をまとめたり、丁寧にアイラインを入れたり、時間をかけて身だしなみを整える。

音楽会が始まる16時まで、部員たちは運営スタッフとして担当の持ち場につく。事前に手渡されている進行マニュアルには、学生個人の名前が他の運営スタッフと同様に担当場所に記載される。半数の部員たちが受付業務に

つく。音楽会を経験した先輩部員は新しく運営スタッフになった企業人を相手に受付の方法を確認し、新しい提案をする場面もみられる。また客は受付に学生がいるとは考えていないため、受付担当部員は「座席を変更してほしい」「後からくる友人に伝言をしてほしい」といった要望にも適切に対応しなくてはならない。

客席案内担当となった部員は会場の最終整理にあたり、他のスタッフと個人的に話をする機会がある。コンサートは各種企業の寄り合いによる実行委員会の運営であるため、スタッフの中には有名企業の管理職の人々が加わっている。普段は関わりのない企業人と話することは、多くの部員にとって心理的なハードルが高いものであるが、次の事例に挙げるように、音楽会を就職のための機会として積極的に活用する者たちもいる。

事例 1. 就職につながる働きかけの模索

B はスタッフの一人に「あの、A 社の方ですか」と声をかけた。声をかけられた男性が B 社であることを伝えると、B は「B 社って制服を着ている女の人がありますよね」とすぐに機転を効かせて、男性スタッフの会社についても関心を持って調べていることを伝えた。さらに続けて「B 社に就職するにはどうしたらいいですか」と就職活動のアドバイスを求めた。男性スタッフは積極的な B に驚いた顔をしながら「君、何年生？」と尋ねる。B が 2 年生であると答えると、「会社のもっと上の人もくるから、聞いてみたら」と親切にアドバイスをした。B はそこで男性職員に名刺をいただけませんかと申し出た。男性スタッフは「僕の名刺でいいの」と笑いながら、B に快く名刺を渡した。

同クラブの学外における活動は、インターンシップの授業のように学生個人と企業との関係が成立し、時として就職の内定に結びつくことがある。事例に挙げた B のようにイベント等の機会を利用して企業人と触れあい、各会社の仕事内容や企業風土についての情報を集めることを通じて、その後の進路選択の参考にする学生は多々見られる。ただし「就職」を目指したクラブ活動において、部員たちは互いをともにスキルを磨く仲間であると同時にライバルであるともみなしている。そのため、こうした就職活動はあくまで個々人で行われ、その成果についても公にしない傾向にある。上記の B も、B 社の男性から名刺をもらったことを他部員には秘密にしていたと語った。

音楽会実施期間

コンサートが開始されると、スタッフは休憩や食事の時間になる。この時間にも企業のスタッフと対話する機会がある。

事例 2. 職業人と学生の境界

部員たちは、2、3 人ずつ食事場所へ赴く。C と D の食事に筆者も同行した。そこではすでに何人か食事をとっており、コンサートのスポンサーでもある A 社の管理職の男性も交じっていた。「お疲れさまです」と筆者がいうと「お疲れ様。無事にはじまりましたね」と A 社の男性も応じる。A 社の男性は筆者の後ろにいる部員の姿をみて、「君たちもお疲れ様。何年生？」と話しかける。「2 年生です」と C が返事をする。「そう、どんなところに就職したい」「観光です。旅行会社とかホテル」と会話が始まった。しかし「運輸関係はどう」と問いかけに C は「いいですね」と答えたものの、その後に対応に戸惑ってしまった。控室に戻った C は、A 社の男性が「何をいっているのかわからなかった」と D に漏らしていた (2014 年 10 月)。

毎年参加している企業の側も学生たちが音楽会で就職に結びつくような機会を得たいと考えていることを知っている。学生たちを気にかけて、親しげに話かけてくれる企業のスタッフは多い。詳細を述べることは控えたいが、この管理職の男性は C に対して、企業が若い新人女性に期待する態度やふるまいがどのようなものかを間接的に伝えていた。それは企業文化や企業のジェンダーを垣間見る機会であったと思われるが、C はその真意を測りかねた。それは彼女たちは音楽会で社会人であるかのようにふるまうが、いまだ学生であり、休憩時間には学生としての理解の仕方と企業人と接するためである。

音楽会終了期間

音楽会が終了した後は、関係者に挨拶をして帰るだけとなり、部員たちは音楽会のスタッフから日常の学生の姿に戻っていく。

事例 3. 疑似体験を終えるとき

控室へ戻る準備をしていると、「君ら、一緒に写真撮ろう。こっちへおいで」と声がする。後片付けをしているスタッフの向こうで、演奏家を囲んで主催者や実行委員会の企業の管理職の人々が、写真撮影をしている。部員の中から歓声が上がると、「早くこないよ、撮影が終わって演奏者の人が控室に戻るよ」と呼びかけられ、「これ持っていて」と学生たちは筆者に自分の持ち物を渡して我先に撮影の枠におさまっていく。人見知りを感じて話していた部員も「早く、早く」とせかさされ、撮影の場へ駆けていく。帰り道では一緒に写真を撮った著名な演奏家について楽しそうに話す（2014年10月8日）

音楽会では学生が運営スタッフの各役割を担い、社会人として行動をすることが求められる。だが、この音楽会での学生たちの位置づけは、2014年の受付担当学生が「音楽会は学生だけど、学生ではない、社会人扱いされたり（そうでなかったり）、社会と行ったり来たりする感じ」（2015年9月1日）とその体験を語る通り、曖昧なものである。音楽会は、事例3に示したように、著名な演奏家と一緒に写真を撮るなどの楽しいイベントでもある。以下では、同クラブが提供するこうした音楽会をはじめとしたイベントが、学生にとってどのような意義を持つ場なのかを考察したい。

3-3. 疑似イベントとしての課外活動

京都観光と女性に対するイメージを考察した工藤泰子は、旅行雑誌の「京女のきれいを学ぶ体験」などから、京都を訪れて舞妓変身体験や着物での散策などの疑似体験をする女性旅行者は、その疑似体験を通じて「京女＝憧れの存在」から学び、憧れの存在に近づく、自己実現欲求の具体化策となっていると指摘する（工藤2003）。

学生たちによる音楽会やイベントでの体験は工藤が指摘するような疑似体験、さらに言えば、歴史学者ブーアスティンが著書『幻影（イメジ）の時代』で提示した「疑似イベント」に近似している。ブーアスティンは複製技術の発展により、本物以上に価値のあるコピーが影響力を持つようになった時代の到来により、マスコミが作った合成的なイベントが日常に充満するようになった中で「疑似イベント」という概念をつくった。彼は「疑似イベント」を、以下の3つの特長を持った出来事としている。第一に、自然発生的でなく、誰かがそれを計画し、たくらみ、あるいは扇動したために起こるもの、第二に、いつでもそうとは限らないが、本来、報道され、再現されるという直接の目的のために仕組まれたもの、第三に、疑似イベントの現実に対する関係はあいまいで、しかも疑似イベントに対する興味は、主としてこのあいまいさに由来する（ブーアスティン1974:17-20）。

同クラブ員が活躍する音楽会や式典、観光大使、ミスコンテストなどは、あくまで一過性の「舞台」である。キャビンアテンダントを模した制服を着て、舞台上上がった瞬間は「本物」の受付嬢や司会、大使となるが、事例1、2で示したように舞台上に上がっている最中でも彼女たちは学生として就職活動をしたり、学生としての考え方の延長で企業人とやり取りをしており、本物の社会人にはならない。同クラブが提供するものは、現実と「創られた」「しつらえた」ものがないまぜの特別な機会であり、それは就職活動や日常の学生生活とは切り離された「非日常」である。この点で、このクラブでの体験は、就業を目的として具体的スキルを身に着けるインターンシップとも、金銭的対価を得るために曲がりなりにも正式な労働者となるアルバイトの経験とも、マナーやスキルを教授される正課授業とも異なる体験である。

女子学生たちに、課外活動がどのような経験であったかを尋ねた時に返答されるもっとも一般的で率直な感想とは、「スキルが身に着いたかどうかは不安だけど、とても貴重な体験だった」（2015年8月31日）といったものである。その貴重な体験の中身は、ミスコンテストを「一生の思い出」と語る部員（2015年9月3日）や、観光大使に選ばれた経験を「ガンバ大阪の試合のときに約1万人の観客の前で、自分の名前が呼ばれて、歓声すごい中、選手たちに花束を贈呈したときの感動は本当に忘れられない」と語る部員（2015年9月3日）の体験と基本的には変

わらない。こうした体験は、工藤が述べる舞妓体験の観光客と同じく、第一義的には自己実現欲求を満たす手段である。彼女たちは必ずしもその後の就職活動において「本物」を目指すことにはならないが、それでも華やかな女性へと一時的にでも近づいた経験は、自らの自己承認の糧となり、就職に至る過程で「憧れ」と現実とを別個のものとして承認するプロセスにおいて貴重な機会となっている。3年次に「ラグジュアリーなホテルの受付」を志望していた2014年副部長Cがクラブを辞めるときには「もう何も思い残すことはない」と言い切り、日本製品の販売業への就職活動へと向かったのと同じく、多くの学生は「クラブで経験できてよかった」とさばけた様子で断言しながら、3年次までの希望とは異なる職種への就職活動を始めるのである。

おわりに

本稿では、ホスピタリティマナーの学びを就職に活かすという平安女学院大学レセプションクラブの活動と、その特色を明らかにしてきた。同クラブは女子学生にとって、就職活動で有利となるスキルを習得する場と期待されていた。しかし同クラブが、課外活動による貴品女性の育成という大学の広報戦略に合致しメディアへの露出や対外的な活動が増えるにしたがって、学生にとってある一定期間に芸能活動のような華やかな体験が疑似的にできるという新たな価値が付加された。またクラブ活動で受付や案内業務などの女性性に特化した接客を担う選抜の過程では、企業が求める女性像に則した者が選抜されるという、ジェンダー視点を反映した構図がみられた。しかし女子学生たちにとって、例えば、キャビンアテンダントや秘書のような企業の求めるよき女性像は、憧れではあるがそれだけを肯定し目指すことが夢のすべてではない。同クラブ活動におけるキャビンアテンダントのような経験は、たしかにその後の進路選択や就業後の自己充足感に影響を与えることに貢献しているが、それには活動内容が持つ遊戯性やイベント性を体験することによる満足感も含まれている。この活動の特徴はなによりもクラブ活動を通して、企業文化で培われた女性役割のジェンダーを経験することにより、女性としての自らのアイデンティティーを考えることにもつながっている。

冒頭で述べたように、社会人基礎力や学士力といった汎用的能力の育成を高等教育機関である大学が担う時代となり、正課授業と課外活動を連動させた新たなキャリア教育の議論がなされつつある。そこでキャリア形成に資するために検討される課外活動は、人間・人格形成と実務的スキル習得に重きをおいている。だが課外活動とは何より、遊戯性や楽しみを含むイベント性を基盤にした活動で、人間力や就職に活かされるスキルの体得はそこから派生する副次的な効果である。本稿で検討した課外活動は、観光産業への就労を目指す女子大学生が就職に有用な接客スキルを学ぶと同時に、企業や社会が期待するジェンダー・イメージや自身が抱く憧れの職業人イメージへ接近することで自己実現欲求を満たし、そこで得たスキルや評価の汎用可能性を模索しながら、各自の就職活動に踏み出していくための機会となっていた。中等教育課程まで多くの学生は個性重視の環境におかれ、現実社会や企業文化と触れあう機会をほとんど持たない。離職率の高さが問題とされる今、職業移行期の学生が個人の特性や、やりがいを見つけていくためには、特定の就職や就業後の活躍に必要な力を培う場だけでなく、企業・社会／自身のイメージや期待を「イベント」「楽しみ」のなかで捉え返す場を作ることも課外活動に課せられたひとつの役割として重要であると考えられる。

注

- 1 「躰・心得・愛」という平安女学院の教育目標を表した表象
- 2 代々木ゼミナール『2015 大学入試難易ランキング最新版』では偏差値 42
- 3 2012年10月京都新聞、2013年9月毎日新聞、10月NHKテレビ、2014年11月テレビ東京、2015年関西テレビなど

参考文献

新井洋輔・松井豊「大学生の部活動・サークル集団に関する研究動向」『筑波大学心理学研究第26号』pp. 95-105, 2003

- 上野千鶴子『女縁を生きたおんなたち』2009, 岩波文庫
- 江口彰「インターンシップと正課外活動の経験比較」『インターンシップ研究年報 第12号』pp. 33-38, 2009
- 大東貢生他「スポーツ推薦入学当事者が「勉強ができない」と語る意味：高等教育機関における課外活動の研究（10）」『佛大社会学 39』pp. 29-34, 2015（研究ノート）
- 工藤泰子「京都観光と女性」『観光とジェンダー 国立民族学博物館調査報告 37』pp. 127-140, 2003
- 佐藤龍子「学生の自発性を促すキャリア教育と正課外活動」『京都大学高等教育研究第13号』pp. 25-34, 2007
- 白河桃子『格付けしあう女たち「女子カースト」の実態』2013, ポプラ社
- ジーン・レイブ、エティエンヌ・ウェンガー『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』（佐伯胖訳）1993, 産業図書株式会社
- 杉浦礼子・安部耕作「日本におけるキャリアデザインの変遷」『高田短期大学紀要 133』pp. 67-78, 2015
- 鈴木翔『教室内カースト』2012, 光文社
- 田辺繁治・松田素二編『日常実践のエスノグラフィー—語り・コミュニティ・アイデンティティ—』2002, 世界思想社
- 土井隆義『キャラ化する/される子どもたち—排除型社会における新たな人間像』2009, 岩波ブックレット
- 時任隼平・久保田賢一「卒業生を対象とした正課外活動の成果とその要因に関する研究」『日本教育工学会論文誌 36（4）』pp. 393-405, 2013
- 永田美江子「女子大学におけるホスピタリティ教育及びマナー教育と「女子力」—平安女学院大学の実践を事例として」『HOSPITALITY 第24号』pp. 19-32, 2015
- 日濁淳子・森口竜平・小山田祐太・齊藤誠一・城仁士「正課外活動におけるヒューマン・コミュニティ創成マインドの変化」『神戸大学大学院人間発達環境研究科研究紀要第4巻第1号』（研究報告）pp. 127-133, 2010
- ダニエル・J・プーアスティン『幻影の時代 マスコミが製造する事実』（後藤和彦、星野郁美訳）1974, 東京創元社
- 溝上慎一「大学生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討—正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す—『京都大学高等教育研究第15号』pp. 107-118, 2009
- 宮崎あゆみ「女子高におけるジェンダー・サブカルチャー—女性性への適応と反抗の過程—」『東京大学教育』pp. 169-177, 1993a
- 宮崎あゆみ「ジェンダー・サブカルチャーのダイナミクス—女子高におけるエスノグラフィーをもとに—」『教育社会学研究第52週』pp. 157-177, 1993b

The Role of Extracurricular Activities in Women's Career Formation: A Case of *Receptionist Club* Activity for Sightseeing Hospitality Education in a Women's University in Japan

NAGATA Mieko

Abstract:

The career education in university attracts attention in recent years and extracurricular activities began to be connected with career education. However, there are few studies that investigate what kind of influence extracurricular activities have on female students for their career formation. This paper studies an example of extracurricular activities *Receptionist Club* in a women's university in Japan, by participant observation and interviews with female university students who are preparing for job-hunting. The result shows that, though this activity, the female students learn the gender image that companies give to female workers in specific jobs, and the students have opportunities to respond to that expected images. The students also understand their dream jobs may not be that great in reality. The extracurricular activity is not only to teach students necessary skill to become professional or directly provide opportunity to reach to that job; rather than that, it provides the opportunity for the students to act as if they were professional, and by enjoying this mock-job experience as they play the role of professional but are treated as students, they learn which jobs they are suited or not. The conclusion argues that these are importance of extracurricular activities for female students.

Keywords: extracurricular activity, gender, manner, hospitality, career education

女子大学におけるキャリア形成と課外活動との連関 ——観光ホスピタリティ教育とレセプションクラブを事例に——

永田 美江子

要旨:

近年、大学の課外活動とキャリア教育との接続をめぐる研究が活発化している。そこでは、人間形成や就職に直結したスキルを養う場としての課外活動を役割が数多く提示されてきたが、キャリア教育との連関をジェンダーに注目して検討する研究は立ち遅れている。本稿では、平安女学院大学の課外活動「レセプションクラブ」の参与観察と部員に対する聞き取り調査をもとに、課外活動の意義と就職活動とのつながりを検討した。その結果、同活動は企業が特定の職種の女性に付与するジェンダー・イメージを知り、それを特定のイベントで消費する機会であるとともに、女子学生の憧れの職業が憧れ通りではないことを理解する機会であることが明らかになった。それを通じて本稿では、職業人になるために何が必要かを学ぶ場だけでなく、いかなる職業人になりたいかを楽しみのうちに模索する場を作ることも課外活動の役割となりうることを主張した。